

が、力不足であったため、正木はのちに結城素明を教授に昇格させ（大正三年）、新たに川合玉堂を起用し（同四年）、江亭を日本画科以外の日本画指導にあたらせるなどの措置をとった。

⑥ 菱田春草遺墨展覧会

明治四十五年四月、本校で菱田春草遺墨展覧会が開かれ、注目を集めた。明治三十一年に岡倉覚三の後を追って本校を去った春草は、日本美術院で横山大観とともに日本画革新の先頭に立ち、朦朧体と非難されながらも研鑽を重ね、やがてそれを脱却して第一回文展における「賢首菩薩」、第三回文展における「落葉」、第四回文展における「黒き猫」と苦闘の成果を示し、文展審査委員ともなったが、四十四年九月十六日に病死した。実に惜しむべき死であった。葬儀は十八日に青山斎場で行われ、岡倉覚三、横山大観、下村観山をはじめとする二百余名が参列。遺骸は郷里の信州飯田に葬られた。

『東京美術学校校友会月報』の編集部は、同誌第四巻第五号に大観、春草の「絵画に就いて」を、第八巻第七号に春草の「画界漫言」を、また、第九巻第一号に同者の「古画の研究」を全文掲載するなど、春草の動向に対して関心を示していたが、その死去に際しては第十巻第二号に追悼記事を掲げ、併せて『東京日日新聞』に載った尾竹竹坡と横山大観の追悼談話および『東京朝日新聞』に載った岡倉覚三の談話を転載し、さらに第十巻第四号には「なにはばら」なる人の追悼文を掲載している。春草の死は人々に大きな衝撃を与えたい。

春草遺墨展覧会は春草歿後直ちに関係者たちによって計画され、

準備期間が短かったにも拘らず文展出品作を含む三百余点が集まり、充実した展覧会となった。その経緯は校友会月報に次のように記されている（展覧会の概況については53頁「東京美術学校近事」を参照されたい）。

○春草畫伯追弔展覧會の計畫

嚮に物故せられたる菱田春草氏の爲め、其知己たりし岡倉覺三、寺崎廣業、横山大観、下村観山、川合玉堂、木村武山、秋元酒汀、井口長藏、笹川種郎（號臨風）、齋藤隆三等諸氏の發起にて、明年四月二日より同六日迄五日間、東京美術學校内に於て追弔展覧會を催ふし、春草氏の遺墨を蒐集展観すると同時に、廣業、大観、玉堂、観山、武山、其他十畫家の新作品をも陳列して希望者に賣約し、其代金は悉く遺児の教育資金に宛つる筈なるが、岡倉、秋元、井口三氏は、其材料として、各金屏風一雙づゝを寄附することを約せし由。尚ほ春草氏の遺墨は、同展覧會に出陳すると共に、之を撮影して遺墨集を發行する事となりたるに付、發起人は此際遺墨所藏の人々に向ひ、成るべく其の祕藏品の出陳を乞ひ、該畫集をして完璧たらしめんことを希望し居る由。因に同會に關する事務は、一切下谷區茅町二の一〇、横山大観氏方（電話下谷五〇八二）にて取扱ふといふ。

（『東京美術学校校友会月報』第十巻第二号）

○春草氏遺墨展覧會 第三回文部省美術展覧會に「落葉」を出してより畫界を風靡し、其第四回より審査員に擧げられたる本校出身の故菱田春草畫伯が、宿痾の腎臟病の爲め昨秋天折せる事は當

時記せる處なるが、畫伯の筆が社會に迎へられしは、其落葉以來の事にして、其の以前にも賢首菩薩其の他傑作尠からざりしも、病身なりし上に多年眼病を患ひたれば、筆執る事も多からず、且つ亂作を避け、如何なる小品と雖も之れを研究的に物されしかば、他の畫家に比して作品少く、従つて遺産とてもなく、遺子の教育も充分ならざるより、今回岡倉覺三、玉堂、大觀、廣業、觀山、臨風の諸氏等發起となり、來四月二日より向ふ一週間、本校構内に於て追悼展覽會を開催して遺墨を陳列し、且つ有志より寄贈の金屏風五双に現代諸大家揮毫し、其他各畫家の寄附畫をも賣却し、出陳の遺墨を寫眞版となして一部の畫帖となし、之れを有志に頒ち、其の上り高を以て遺子の教育費に充つる筈なりと。今の世に於て此の美學を見る、洵に喜ばしき事なり。而して遺墨展覽會事務所は本校文庫内に設けられ、出陳せんとする向は二月中に申出づべき定めなりといふ。

(同第十卷第五号)

外に同誌第十卷第八号(同年五月)には前出「なにはばら」の本展覽會に関する論評も掲載されている。岡倉覺三らが発行した『春草画集』によれば、本校は「魚類」(写生成績)、「寡婦と孤児」(卒業制作)および「水鏡」を出品したことがわかる。

⑦ 青木繁遺作展覽會

明治四十五年三月十五日より同月三十一日まで上野公園竹之台陳列館で美術新報主催第三回美術展覽會が開催され、会場の一隅に青

木繁の遺作五十一点が陳列された。

青木は明治三十七年本校西洋画科卒業。在学中、三十六年九月開催の白馬會第八回展に「黄泉比良坂」(東京芸術大学蔵)ほか十数点を出品し、その神話などに題材をとった独自の浪漫主義的作風は画界に大きな波紋を投げかけ、白馬賞第一回受賞者となった。卒業した年の秋には「海の幸」を白馬會第九回展に出品。明治四十年の東京勸業博覽會には「わだつみのいろこの宮」を出品したが、同年夏には郷里久留米に帰り、貧窮と落魄の放浪生活の中で四十四年三月二十五日、数え三十歳の若さで病死した。遺作展はその一周忌にあたって友人たちが開催したもので、出陳作は大正二年政教社発行『青木繁画集』に多少作品を追加して収められた。同書はほかに青木の歌稿、書簡、画談および友人たちによる「追悼と感想」(坂本繁二郎、森田恒友、高村真夫、正宗得三郎、有島生馬、木下柰太郎、岩野泡鳴、蒲原有明、梅野満雄)、年譜が収録されており、青木繁研究に不可欠の資料となっている。

青木繁が日本近代絵画史上に輝かしい地位を占めるのはずっと後になってからである。死去および遺作展開催の際には友人たちの書いたものが新聞や雑誌に載ったが、世間一般の評価は決して高いとは言えなかった。本校の校友会月報などは、その死去に際してわずか数行の記事を載せただけで、遺作展については全くノーマコメントであって、その扱いは前記菱田春草の場合と極めて対照的であった。

⑧ 高勾麗時代古噴の壁画模写